

ひきこもりの支援に出張指導 元当事者の「レンタル空手家」



「レンタル空手家」の
遠藤さん <http://forfuture.web.fc2.com/>

くれた。最初は気が進まなかったが、道場通いを続けていくうちに試合にも出るようになり、いつのまにか自傷癖は消えていた。

心を病み、薬の副作用によるけだるさから家にひきこもりがちになり、体力も気力も奪われて病気をこじらせ、自殺に走りかねない。

そんな若者が少なくない中で、悩める彼らの自宅まで出張して、空手を教えることをきっかけに自立を支援するサービスを始めた男性がいる。「レンタル空手家」を自称する遠藤一さん(28)だ。

遠藤さん自身、高校時代からうつ病と診断され、卒業後は一人暮らしの部屋にひきこもり、自ら刃物で全身を100カ所も傷つける生活だった。

同じように心を病む友達が続々と処方薬を大量に飲んで亡くなり、落ち込んでいたところに、知人が空手を勧め

既に空手歴は6年。黒帯として3年前から子どもたちに空手を教えている。そして昨年春から「レンタル空手家」として、東京都北区を拠点に出張指導を始めた(初回は90分1500円、交通費別)。

また、ひきこもりが外に出るチャンスを作る取り組みの一環として「皇居を2人1組でマラソンしよう」と呼びかけ、今年1月19日の皇居マラソンには13人の現役ひきこもりや元ひきこもりなどが参加し、全員が完走した。うつ病と過呼吸発作に悩み、3年前から通院中という三重県から参加した29歳の女性は、

「走った後の水がおいしいこと! 一生懸命に何かした後ってホントに気持ちいい。いろんな人に感謝したい気持ち

でいっぱい」

と、体験談をブログにつづっている。ちなみに彼女は後日、仕事に復帰した。

「空手は相手を必要以上に傷つけないで済む技術であり、自分を大事にする感覚も体で

つかめる。そうした経験を

かし、自分自身と仲良くできない人たちに「薬より体力。一人より仲間」と訴え、社会復帰のチャンスを増やしていきたい」(遠藤さん)

生きる力、だ。(今 一生)

外国人に仕事教え自分はクビ 人間を食らうグローバル経済

日本経団連が今年の春闘で賃上げ容認の方向を示し、働く者にとってはやっとなき、なのだが、サブプライムローン問題で景気の先行きが不透明になったとかで、財界は再び「競争力に影響が……」と

「国際競争力」のご託宣を



職探しをする米国人労働者
AP Images

前にすると、日本人はどうも押し黙る傾向にある。が、『The World is Flat』(世界は平らである)——といわれる今、沈黙は損である。そのいい例が米国にある。

ベストセラー本「フラット化する世界」は、ネットなど新通信技術の発達で経済のグローバル化が進み、米国人がインドや中国の労働者とパイを奪い合うことになった状況を描き、話題になった。

米国企業がインドにコールセンターを置くなどアウトソーシング(外部委託)は当たり前になったが、今ではインドから技術者をヘッドハンティングし、米国人社員に教育させて

から、その米国人のクビを切る大手金融機関もあるという。「先週、金融他社の友人が解雇された。次は自分の番か? この年で次の仕事が見つかるだろうか。不安だ」(金融最大手50代プログラマー)

製薬大手ファイザー社はクリック一つでインドのアウトソーシング会社にリサーチを依頼できる「Office of the Future (oof)」(未来のオフィス)なるシステムを導入したばかりだ。時給215ドル(約2万3000円)は下らない国内リサーチ会社の10分の1程度のコストで済むという。

最近ではインドの人情費も上がったため、次はベトナム、という声も聞かれる。もはや、(アメリカ人の仕事などというものはない)(前掲書)とはレトリックではない。

ミシガン州では自動車産業を中心に40万人もの製造業関連の雇用が消えた。オハイオ州アパラチア地方では自動車・鉄鋼業衰退で、住民の32%が貧困ライン以下の生活を送る。

漢字のある国なら、経済が「経世済民」の略であるのは自明なのだが。(肥田美佐子)